

クリスマス メッセージ

闇の中に輝く光

イザヤ書 9章 1～6節

大学宗教主任 高砂 民宣

未曾有の試練と危機とに直面することになった2020年も、残すところあとわずかとなりました。昨年の今頃、新しい年にこのような世界規模の大惨事が起こるとは、いったい誰が想像し得たのでしょうか。私たちは今、深い闇に閉ざされたような混迷の状態の中で喘ぎ苦しんでいます。

青山学院大学では、今年は3月の卒業式も、4月の入学式も中止となりました。特に4月から大学生となった1年生の中には、新しい友人を思うように得ることができず、部活やサークルに入るのも困難な状況となり、「高校4年生」のような気持ちで毎日を過ごしている人が多いと伺っています。また、異例の状況下のために就職活動が思うように行かず、悲しみと怒りを覚えている大学4年生がいます。このように新型コロナウイルスの影響は、様々な所に及んでいます。

感染拡大を防ぐために、大学では5月1日から授業も礼拝もオンラインで行われるようになりました。そして前期の終了と共に、教員と学生の両者を対象に、授業に関するアンケートが実施されました。

教員を対象としたアンケートでは、「授業動画を繰り返し視聴できるので、学生たちの授業理解度が高くなったと感じる」、「対面で

は語り尽くせない、知識体系の深くまで理解した学生が少なからずいた」、「シャイな学生も、オンラインだと質問しやすいのか、例年よりも質問が多かった」といったプラスの回答があったのに対し、「通常の授業準備の倍以上時間が掛かる」、「学生たちの反応が分からない」といった回答も見られました。

また、学生を対象としたアンケートでは、「通学時間が無くなったことにより、時間を有効活用できる」、「青山キャンパスに所属する学部生でも、相模原キャンパスで開講される講義を受講することができた」、「自分の命、家族や周囲の大切な人々の命を考えると、オンライン授業が望ましい」といった好意的な意見がある一方、特に1年生の中に「友人が作れない」、「先輩からアドバイスをもらえない」といった意見がありました。また、「課題の量が多くて目が疲れる」、「ひたすらパソコンと向き合う毎日で、ストレスを感じる」、「精神的な負担が大きい」、「睡眠時間が足りない」といった否定的な意見もありました。アンケートを通して、教員と学生の両者ともに賛否両論様々な意見があることが伺えます。教職員も学生も、暗中模索のような状態で、ようやくここまでたどり着くことができたという思いを抱いています。

そのような状況にあつて、今年もクリスマスが近づいてきました。今年はいつも以上に、旧約聖書に記された預言者イザヤの言葉が身に沁みます。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」。これは紀元前700年頃、イザヤという預言者によって語られた言葉です。アッシリアという大国によって侵略を受け、民族としてのアイデンティティを失いかけていたイスラエルの民。まさに苦難と闇の中を歩んでいたイスラエルの民ですが、彼らは大いなる光を見ると、イザヤは預言したのです。そしてこの預言は、それから700年ほど後に、小さな「ひとりのみどりご」が誕生することによって現実の出来事となります。その「みどりご」とは、イエス・キリストを指しています。そしてこの約束は「万軍の主の熱意」、すなわち神ご自身の情熱によって実現すると、イザヤは力強く預言しています。

私たちも現在、コロナ禍にあつて自由を抑圧されています。そうした状況に置かれているからこそ、今年のクリスマスは何か特別な響きをもって私たちに迫ってくる気がします。世に来てすべての人を照らす真の光であるイエス・キリスト。この御方の御降誕を、皆で心一つにして待ち望み、お迎えしたいと願います。



青山学院の礎を築いた一人であるドーラ・スクーンメーカー宣教師は、恩師に宛てて書いた手紙の中で、女子小学校創設について、「この暗い世界に小さな光を灯す歩みを始めました」と記したそうです。真の光であるイエス・キリストを、本当の意味で頂いたスクーンメーカー宣教師ならではの言葉であると感銘を受けます。

夜空に輝く月は、太陽の光を反射することによって輝いています。私たちも真の光であるイエス・キリストを心の中にお迎えすることによって、その光を反射して輝く者になりたいと祈り願います。

まもなく始まる新しい年も、希望をもって力強く歩んで参りましょう。